

○大橋康宏¹、鏑木淳平²、中川育也²、
日比野康英³、菅野延彦²、(¹野田食菌工業・研、
²富山医薬大・薬、³富山医薬大・遺伝子)

[目的]

椎茸菌糸体培養抽出物 (LEM) より分画調製した
多糖蛋白質画分(LAP1)はマウス脾細胞に対して顕著
なサイトカイン活性を示すこと、LAP1存在下でMφ-T細胞
の相互作用によるT細胞の活性化を確認している
(Hibino et al., Immunopharmacology 28, (1994)
77-85)。今回はTNF-αやNOなどのエフェクター因子の産
生及びSP細胞の細胞傷害性について調査、検討した。

[方法]

(1)LAP1によるマウス脾細胞(SP)からのサイトカインの
産生誘導を調査した。

(2)LAP1存在下でSPとL929細胞を混合培養し、48
時間後の細胞傷害性を調査した。

(3)LAP1を投与したマウスよりナイロンカラム溶出細
胞(NE)を調製し、NEのCTL活性、CD4及びCD8陽性細
胞の存在比を調査した。

[成績]

LAP1存在下で、SPからのNO、TNF-α、IL-1β、
IFN-γの産生誘導が認められ、SPのL929細胞傷害性
が確認された。また、LAP1投与したマウスより得ら
れたNEのCTL活性は対照に比べて高く、さらにNE中
のCD4陽性細胞の割合が有意に増加した。

[結論]

LAP1は単球/Mφを増殖活性化し、非特異的細胞
傷害性を増強すること、また、Mφ-T細胞間の相互
作用により間接的にNE中のT細胞が活性化され、こ
の結果CTLによる特異的細胞傷害性が増強されるこ
とが示唆された。